

# 紫式部集の原形

——日記重複部分について——

原 田 敦 子

はじめに

『紫式部集』の原形が紫式部自撰の家集であることは、諸家の御研究により、現在ほぼ動かないものとなっている。しかし、現存の諸伝本は転写の間に異同を生じ、集原形の復元に種々の困難を伴うこと、他の私家集の場合と異ならない。特に集の後半部においては、諸本間で歌の出入が生じ、歌序を異にする部分がある他、別に第二类古本系付載「日記歌」なるものも存在するなど、『紫式部日記』と重複する部分については、さまざま要因がからみあつて、複雑な様相を呈している。

現存する『紫式部集』の伝本は、第一類定家自筆本系統、第二类古本系統、第三類別本系統に分けられる。<sup>2)</sup>これら三系統には歌数、歌序、本文の異同が存するが、諸本共通の欠脱がある等のことにより、同一の原本から発し、転写の過程で増補・錯簡・脱落等<sup>3)</sup>のことが生じたのであらうとされている。池田亀鑑氏は、この異本が生じた時期を藤原定家書写以前、即ち平安時代末期に溯るであらうと言われた<sup>4)</sup>が、南波浩氏も、定家によつて校定された本が、定家自筆本系として広く世に伝えられるようになったのに対し、定家の爪跡に触れな

かつた他の一系統本が、古本系として、定家本系に対し、異本的存在を示すものとなつたと述べておられる。<sup>5)</sup>

定家によつて書写された本は、おそらく忠実かつ厳密に伝写された、その形態が後世に継承されたと思われるので、第一類の定家自筆本系統にあつては、定家以前もしくは定家の手にかかつた段階での変容が想定される訳である。しかも、定家の時代には、『紫式部日記』と称されるものが現存日記とは少しく異なる形態を有していたらしい。後述の如く、『紫式部集』の歌員・歌序が諸本間で大きく相違するのは、日記と重複する部分であるので、定家もしくは定家の時代以前の両者のかかりが大きな問題として浮び上つてくる。以下の小論では、この家集後半部の『紫式部日記』と重複する部分について、増補、脱落、錯簡などの可能性を検討し、家集原形の復元を試みると共に、現形態に至るまでの変容の過程をも合わせ考察してみたいと思う。

なお、第三類別本系統は、言われる如く本文が粗雑な上、詞書の記述にあつては、勅撰集や「日記歌」などからより詳細なものを転記するという無定見な態度を持し、資料とした勅撰集も「新千載集」を下限とする。<sup>6)</sup>従つて、その成立は他の二系統よりはるかに遅れる

のであり、家集原形の復元作業においては、当然考察の対象から除外する。また、論述にあたって、第一類、第二類両系統に分岐後、定家の手に落ちるまでの第一類本を「定家本」と称することには、いささかのまぎらわしさを伴うので、以下、「定家本(系)」「定家自筆本(系)」「古本(系)」などの名称は用いず、すべて「第一類本(系)」「第二類本(系)」の名称を用いることとした。

第一類本、第二類本両系統間の大きな相違点は、第一に、66(72)の法華三十講五巻の日関係の歌群の有無と、その後の75・76の水鶏の贈答の有無、さらには、この付近における両系統の歌序の違いであり、第二は、寛弘五年秋から冬にかけての宮仕え生活中に詠まれた115(119)の歌群の有無である。日記と重なる家集の部分に、この他の異同はない。というよりは、宮仕えに出て間もなくの頃の詠と思われる57(60)の歌群が、第二類本では一連の出仕後歌群から切り離されてはるか後方に位置していて、錯簡を疑われる以外には、家集全体を見渡しても、この他の大きな異同はない。即ち、「紫式部集」において、第一、二類本で大きく歌員や歌序が異なる箇所は、すべて日記と重なる部分であるということになる。そこで、家集と日記が重複する部分、およびその前後の歌の出入や歌序の違いを簡略に表で示すと、次のようになる。

次表のうち、66(72)は寛弘五年五月五日に道長の土御門殿で行われた法華三十講五巻の日とその翌暁にかけて詠まれた歌で、現存日記には該当箇所を持たないが、第二類本付載の「日記歌」では最初に位置している。この「日記歌」は、日記に存して第二類本家集には

ない歌を後世の編者が増補したものであることが、小沢正夫氏によつて論証されていて、<sup>(8)</sup>まず動かないと思われるので、右によれば、現存日記冒頭部以前に法華三十講五巻の日の記事が存したことが推察される。さらに、定家の『明月記』貞永二年三月二十日条の式子内親王筆の月次絵についての記述に、

件絵被書十二人之歌<sup>被分</sup>月々……五月<sup>紫式部日</sup>記暁景気……

とある五月の暁の景気が、この法華三十講五巻の日の翌暁にあたるであろうこと、『栄花物語』初花巻の法華三十講五巻の日の記事が、敦成親王誕生とその祝儀の記事と共に「紫式部日記」の記述に依拠したらしいことなどに支えられて、現形首部以前に法華三十講五巻の日の記事を含む何らかの記述があり、それが現存日記と共に「紫式部日記」と呼ばれていた時代があったことは、ほぼ間違いないと考えられる。筆者は先に、この法華三十講五巻の日とその翌暁の記事に加うるに、現存日記ではいわゆる消息文的部分の後に位置して年時不明とされている、中宮御堂詣での記事、式部と道長の梅の実の贈答と水鶏の贈答とを一括して、「中宮土御門殿滞在記」と仮称し、もと紫式部の私的覚書として書かれたこれら一連の記事が、現存日記冒頭部以前の合綴されていた時があるとの推定を試みたことが<sup>(10)</sup>ある。66(72)の歌群を、日記に重複する部分として挙げた所以である。

なお、現存日記では三番目に位置する「紀の国の」の歌は、播磨守の碁の負態の歌であつて式部自身の歌ではないため、家集には収載されなかつたし、逆に、寛弘五年九月十六日夜、女房舟遊びの折に詠まれた88「曇りなく」の歌は、皇子誕生の慶事を光や月影にたとえた点で、前日の五日の産養の日の87「珍らしき」の歌と類想歌であるせいか、日記には記されることなく終っている。

〔表一〕

79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	番号	
忘るるは	紀の国の	白露は	女郎花	ただならじ	夜もすがら	真木の戸も	天の戸の	何事と	なべて世の	独り居て	影見ても	澄める池の	かがり火の	妙なりや	初句
七八	／	七七	七六	七五	七四	七三	七二	七一	七〇	六九	六八	六七	六六	六五	類第一
六二	／	七〇	六九	／	／	六八	六七	／	／	／	六二	／	／	／	類第二
／	／	／	／	(16)	(15)	／	／	(5)	(4)	／	／	(3)	(2)	(1)	日記歌
／	③	②	①	⑬	⑰	／	／	／	／	／	／	／	／	／	日記
128	127	126	119	118	117	116		115	100	90	89	88	87	80	番号
亡き人を	誰か世に	暮れぬ間の	うち払ふ	浮き寝せし	ことわりの	雲間なく	水鳥を	菊の露	多かりし	葦田鶴の	いかにいかが	曇りなく	珍らしき	誰が里も	初句
一二六	一二五	一二四	一一八	一一七	一一六	一一五	／	一一四	九九	八九	八八	八七	八六	七九	類第一
六六	六五	六四	／	／	／	／	／	／	九〇	八〇	七九	七八	七七	六三	類第二
／	／	／	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	／	／	／	／	／	／	日記歌
／	／	／	⑫	⑪	⑧	⑦	⑥	④	⑬	⑩	⑨	／	⑤	／	日記

(第一類本—実践女子大本番号 第二類本—陽明文庫本番号)

従来は、第一類本にあって第二類本には存しない、66、72の歌群（以下、法華三十講歌群と称する）、75、76の道長との水鶏の贈答、115、119の宮仕え生活歌群（以下、「菊の露」歌群と称する）を、第二類本における脱落と考えてきたが、清水好子氏が法華三十講歌群の

詞書の精細な検討を通して、日記に重出する歌につき、他人の増補の可能性を論じられてより、これらの歌群の増補ないしは一部増補を指摘する論が多く登場した。清水氏はまた、この増補の可能性が第一、二類本に共通する歌にも及ぶであろうことを示唆されている。

この清水説を受けた菅野美恵子氏は、家集と日記に重出する歌について、家集第一、二類本に共通して存在する部分と、第一類本にのみ存在する部分との、合わせて二度にわたる増補を想定された。共通部分における増補については詳述されていないが、第一類本における第二次の増補は、66・72、75・76、115・119のすべてにわたるものとされている。これに対し、上田記子氏は、細部(69・70)に小異は残しつつも、法華三十講歌群と75・76の水鶏の贈答の第一類本への増補には賛意を表され、一方、両系統に共通する歌と「菊の露」歌群は、第一、二類本分岐前の共通の祖本に存在したと考えられた。河内山清彦氏は、家集の歌の勅撰集や私撰集への入集状況からして、「紫式部集」は俊成や定家達によって発掘されるまで世上一般に流布することなく、しかも俊成、定家が手にしたのは第二類本であつたとの基本的見解に立つて、第一類本にあつて第二類本にない歌はすべて第一類本編者による増補であり、66・68、71・72の法華三十講歌群は今も亡失した「前紫式部日記」からの増補、75・76の水鶏の贈答と115・119の「菊の露」歌群はすべて「新勅撰集」入集歌であり、家集の詞書が日記や「日記歌」と密着していることから、これらの歌を日記や「日記歌」により「新勅撰集」に入集させた定家が、逆に上記の「新勅撰集」入集歌を紫式部の家集の中にとどめておこうと、増補をはかつたのではないかと述べられた。かくて、第二類本をもとに第一類本を編纂したのは定家その人であり、「新勅撰集」入集歌を第一類本に増補した際、老齢病弱の身の定家が手にしたのは、「紫式部日記」ではなく、彼自身が以前に日記をもとに第二類本にはない歌を抄出しておいた、「日記歌」であつたらうとされるのである。さらに、久保本寿子氏は、日記もしくは「前紫式部日記」に

重なると思われる家集の歌を、(A)両系統に共通して歌があり、しかも現存日記に対応する歌があるもの、(B)現存日記と第一類本に共通してあるが、第二類本にはないもの、(C)現存日記に対応する歌がないもの、(D)現存日記にのみ見えるもの、の四グループに分けられ、その詞書の比較検討から、(A)・(B)・(C)の三段階三次にわたる後人増補の可能性を指摘された。

また、清水論文を明らかに視野に入れたこれらの論とは別に、夙く福島律子氏は、第一、二類本で歌序の相違している箇所が主として「日記歌」の存するところであるのに着目して、第二類本に俊成が「日記歌」を付載しておいた俊成所持本を祖本として、第二類本にみられる年代順的配列を考え、「日記歌」の部分を整理改編したのが第一類本であり、その改編者はおそらく定家であつたらうとする仮説を提出しておられる。<sup>(13)</sup>

以上、畢竟するに、問題は、家集と日記の重複箇所のうち、第一、二類本共通部分の増補の可能性の有無と、第一類本独自部分の全体または部分の、一回的もしくは段階的な増補の可能性の有無、という点に絞られてこよう。一つ一つの解釈は容易ではないが、まずは詞書の詳細な検討から始めねばなるまい。

## 二

家集第一、二類本に共通する歌が日記に重出する場合には、家集の詞書と日記の地の文との間に微妙な違いが見られ、日記の文章には、家集の詞書とは異なつた作者の思惟やあからさまな感情の片鱗が写しとられていることについては、既に述べたことがある。<sup>(14)</sup>清水好子氏は、87「珍らしき」の詠歌事情が日記の記すところと家集の

詞書とでは多少異なっていることを、家集のある箇所の詞書や排列に他人の作為が認められる事例の一つとして挙げられたが、後述する如く、逆にこうした微妙な差違こそが、他人の手の介在を否定する証左となりはしないだろうか。河内山清彦氏は、家集第一、二類本共通歌で日記に重出する77・78・87・89・90・100の六首の詞書と、日記の地の文を比較検討して、「同じ詠作状況を説明しながらも、片方が他方に取材したような密着性を示す同文関係ないしは縮約現象は存在せず、同一の作者（経験者）であるがゆえに可能と言える、日記と歌集の形式の相違に応じた自在な書き変えがなされ、むしろ微妙な齟齬さえ見出されるのである」と述べられた。従うべきであろう。家集第一、二類本に共通して存在する歌は、やはり、式部自身の手によって集中に置かれたと見ねばなるまい。

これに対して、第一類本にのみ存して第二類本にはない法華三十講歌群には、後人増補の跡が顕著である。前掲清水氏の御論では、法華三十講五巻の日とその翌晩の歌66～72の第一類本詞書が時として不必要な程冗長であったり、反面説明不足であったり、よく吟味整理されたものとは言えないところから、到底紫式部の文章とは考えられず、後人の補入であろうとされ、この詞書の背後に詞書作者を束縛牽制した「紫式部日記」の存在を想定されている。67の詞書「菖蒲の香今めかしう匂ひ来れば」が、「かがり火の」の歌に不必要であること、68の詞書「公ごとと言ひまぎらはすを」は、何をそのように「言ひまぎらは」したのか、また、「向ひたまへる人」が一体誰なのか、いずれもこのままでは不明であること等々、一々首肯すべき御指摘であって、法華三十講歌群に関する限り、第一類本の後人補入はまず動かないと思われる。この歌群に関しては、諸家の

説も殆んど後人補入に傾いているので、その点では問題はないとも言えるが、第二類本に何故69「影見ても」の歌一首のみが載せられており、第二類本付載の「日記歌」から69・70の二首が抜け落ちているのかは、必ずしも明らかにされていない。

今井源衛氏は、第二類本が「影見ても」一首を残して他の六首を欠くのは脱落であろうとされ、この歌の第二類本の詞書が第一類本といちじるしく異なつて簡単であるのは、この部分の損傷が詞書にも及んでいたため、後に適当に補つたようなことがあるかもしれないと言われた。第一類本の方を古形とする御説はともかく、第二類本詞書の補修の可能性に言及されたのは、非常に示唆的である。菅野美恵子氏は、第二類本には「影見ても」の歌の返歌が記されていないことから、第二類本編者が最初から「影見ても」の歌を独詠歌として記載したと考えられ、これとは別に、第一類本における法華三十講歌群の増補も想定されているが、上田記子氏も指摘されている通り、別の系統本における増補が同じ箇所で生じるといふのは、偶然が過ぎよう。

上田氏はまた、日記に重複する歌で両系分岐前の家集祖本に収められていたと推定される歌は、日記の資料にもなった文反故、備忘録の類から別人が収録したとの考えに立つて、この祖本には69・70の贈答が収めてあつたが、両系分岐前にまず70の返歌と詞書が脱落して、第二類本では69の歌と詞書のみが受けつがれ、第一類本では、脱落の跡を残して継承されていたものを手にした編者が、家集に大量の脱落があると早合点して、日記から66～68の歌と詞書、69の詞書、70～72の歌と詞書を切り取つて増補してしまつたものと推定された。筆者は、家集祖本にあつて第一、二類本に共通する歌を別人

歌

第一類 本家集詞書

第二類 本付載日記歌詞書

<p>66 妙なりや今日は五月の五日とて 五つの巻の合へる御法も</p>	<p>土御門殿にて、三十講の五巻、五月五日にあたりしに</p>	<p>三十講の五巻、五月五日なり。今日しもあたりつらむ提婆品を思ふに、阿私仙よりも、この殿の御ためにや、木の実もひろひおかせむと、思ひやられて</p>
<p>67 かがり火の影もさわがぬ池水に 幾千代すまむ法の光ぞ</p>	<p>その夜、池のかがり火に、御燈明の光り合ひて、昼よりも底までさやかなるに、菖蒲の香今めかしう匂ひ来れば</p>	<p>池の水の、ただこの下に、かがり火にみあかしの光りあひて、昼よりもさやかなるを見、思ふこと少なくは、をかしうもありぬべきをりかなと、かたはしうち思ひめぐらすにも、まづぞ涙ぐまれける</p>
<p>68 澄める池の底まで照らすかがり火のまばゆきまでも憂きわが身かな</p>	<p>公ごとと言ひまぎらはすを、向ひたまへる人は、さしも思ふことものし給ふまじきかたち、ありさま、よはひのほどを、いたう心深げに思ひ乱れて</p>	<p>おほやけごとと言ひまぎらはすを、大納言の君</p>
<p>69 影見ても憂きわが涙落ち添ひてかごとがましき滝のおとかな</p>	<p>やうく明け行くほどに、渡殿に来て、局の下より出づる水を、高欄をおさへて、しばし見おたれば、空の気色春秋の霞にも霧にも劣らぬころほひなり。小少将のすみの格子をうちたたきたれば、放ちておし下したまへり。もろともに下り居て、ながめるたり。</p>	<p>(第二類本家集詞書) 土御門院にて、遣水の上なる渡殿の簀子にゐて、高欄におしかかりて見るに</p>
<p>70 独り居て涙ぐみける水の面にうき添はるらん影やいづれぞ</p>	<p>返し</p>	<p>返し</p>
<p>71 すべて世の憂きに泣かるるあやめ草今日までかかる根はいかがみる</p>	<p>明かうなれば入りぬ。長き根を包みて</p>	<p>五月五日、もろともに眺めあかして、あかうなれば入りぬ。いと長き根を包みてさし出でたまへり。小少将の君</p>
<p>72 何事とあやめは分かで今日もなほ袂にあまるねこそ絶えせね</p>	<p>返し</p>	<p>返し</p>

の収録だとする上田氏の御説には基本的に賛しないが、もし氏の言われる如くだとすると、それは別人の収録というよりは増補とすべきであろうし、その編者はかなり自由な態度で増補すべき歌を選挙し、集中の随所に配列したことになる。そうしたことができる人物で、しかも日記の資料にもなつた文反故、備忘録の類を手に行うことができる人物がいるとすれば、それは紫式部その人に限りなく近づいてゆくのではなからうか。そのような人物が、69の第二類本詞書に見える「土御門院」の如き、日記にも家集にも登場せず、従つて紫式部の用語とは思われない呼称を用いるとは、到底考えられない。岡一男氏は、この「土御門院」なる呼称が行成の「権記」などに散見されることから、当時の男子の用語であつたと指摘されている。「土御門院」という語は「小右記」や「左経記」にも時として見えるが、和文系の文章には、「土御門殿」（大鏡・栄花物語）、「京極殿」（枕草子・栄花物語・赤染衛門集・出羽弁集）、「上東門院」（栄花物語）とあつて、「土御門院」が用いられることはなかつたようである。この点からすると、少なくとも、「影見ても」の現存第二類本の詞書に男性の手が加わつてゐるのは、間違ひあるまい。

ここで基本的な問題に立返つてみると、「影見ても」の歌が第一、二類本に共通して存在するという事実からして、他の場合と同じく、家集の原形に「影見ても」の歌、もしくはこの歌を含む法華三十講関係の歌が存在したことは確かであろう。しかも、この箇所の第一、二類本の現形態に差違が見られ、それぞれの詞書にいずれも式部ならぬ他人の手が入つてゐることからすれば、集の原形に存した法華三十講関係歌が何らかの損傷を受け、両系分岐後に第一、二類本が各自これを補つたと考えられる。以上のことから、法華三十講歌群

の後補の経緯を推定すれば、次の如くならう。

家集の原形には、「影見ても」の歌の前後に法華三十講関係歌が収載されてゐた。現存第一類本に存する七首全部が収められていたかどうかは不明である。ところが、早くにこの箇所に損傷を生じ、「影見ても」の歌一首を残して、この歌の詞書も他の歌もすべて脱落してしまつたと思われる。共通の祖本においてこの歌の前後に損傷の跡が認められたため、第一、二類本はそれぞれ独自の補修を施した。その際、両系統本の資料とされたのが、法華三十講歌群を含む（仮称）「中宮土御門殿滞在記」だったのである。第一類本は、「影見ても」の詞書を補うと共に、前後に六首の歌と詞書をとり込んだが、詞書の作成にあつて原資料に大きく牽引されたため、歌の詞書としては著しく冗長かつ不備なものが出来上つたことは、清水氏の御指摘の通りである。第一類本では法華三十講歌群の後に、73・74の小少将との水鶏の贈答をはさんで、75・76の道長との水鶏の贈答が記されているが、第二類本には75・76の贈答はない。これはおそらく、第一類本の編者が「中宮土御門殿滞在記」から法華三十講関係の歌と詞書を大幅に補入した際に、同じ資料の中に存した道長との水鶏の贈答をも共にとり込んだのであろう。私見によれば、「中宮土御門殿滞在記」に含まれてゐた中宮御堂詣での記事は、法華三十講結願の日の寛弘五年五月二十二日とその翌晩のもの、梅の実際の贈答と水鶏の贈答は、同年五月末から六月初旬にかけてのことと考えられる<sup>(19)</sup>。第一類本水鶏の贈答の詞書「夜更けて戸をたたきし人、翌朝」という表現は、日記の地の文

渡殿に寝たる夜、戸をたたきし人ありと聞けど、おそろしきに、音もせで明かしたるつとめて、

から、傍線部分を引き出して構成したとおぼしい。右の家集詞書は、日記の記すところから事実関係、修辭共に一歩も出てはいないのである。

このあたりの第一類本家集の歌の配列を見るに、法華三十講歌群末尾の71・72は式部と少少將の君とのあやめの贈答、第二類本とも共通する73・74は同じ少少將の君との水鶏の贈答、77・78は道長との女郎花の贈答である。従つて、71・72と73・74は少少將の君という贈答の相手、73・74と75・76は水鶏という題材、75・76と77・78は道長という贈答の相手といった具合に、連接する贈答が共通点をもつて鎖状につながっている。こうした意味で75・76は、日記中の水鶏の贈答を補入するのにまさしくうつつけの場所であつた。同じ資料に載せられている道長との梅の実の贈答が、家集に増補されることなく終つたのは、このような恰好の挿入箇所を見出さなかつたからであらう。

一方、第二類本は、残された歌が「影見ても」一首であつたため、もともと家集には法華三十講関係歌はこの一首だけが独詠歌として収められていたと判断し、原資料の文章をこの一首のみにあてはまる詞書に書き改めた。歌の詠まれた場所を「土御門院」と明示するのもこのためであるが、前述の如く、この「土御門院」なる呼称が、男性の編者の存在を暗に示唆している。

第一、二類本は、法華三十講関係歌の後で大きく歌序を異にし、現存第二類本が、「影見ても」の歌と少少將の君との水鶏の贈答の間に、79・80の男の夜離れを歎く歌と、116・118の少少將死後の哀悼歌群を載せるのに対し、第一類本は、79・80を道長との女郎花の贈答の後に、116・118を家集巻末に置く。これは、この部分に脱漏を想

定した第二類本編者が、その欠損を第一類本編者の如く日記の側の資料によつて埋めるのではなく、集中の歌の置換によつて埋めようとしたのか、或いは、上に述べた歌の連環を完成に導くために、第一類本編者によつてとられた措置であるのか、今のところ、筆者にはいずれとも断定し難いが、いずれにせよ、こうした両系統本の歌序の差異が、法華三十講関係歌の補修に原因を有することは間違いないところであらう。

なお、「日記歌」が第二類本にはない「独り居て」の歌を収載しなかつたのは、この歌の作者が少少將の君であつて式部自身ではないからで、「影見ても」の贈答を欠いて返歌のみを載せるまでの意義を認めなかつたからであらう。さらに付言すれば、日記現形首部以前に合綴されてあつた「中宮土御門殿滞在記」は、後に法華三十講五卷の日の翌暁の記事と結願の日の中宮御堂詣での記事との間に損傷を生じて、両者の接続関係が分らなくなると共に、「廿二日の暁」が「十一日の暁」と誤られて、中宮御堂詣での記事の年時が不明となり、遂にはこの記事以後が記事の切れ目のよい現在の位置、即ち消息文的部分の後に挿入されたのであらうと考えられる。「日記歌」が依拠したのは、この段階の「紫式部日記」であつた。

### 三

115・119の「菊の露」歌群は、主家筋の倫子や同僚女房との交渉をまとめたものであるが、第二類本にはない。

筆者は先に、第一、二類本に共通して存在する歌は、家集の原形にも存したであらうことを述べたが、この共通部分に属する87の歌と、「菊の露」歌群の最初に位置する115の歌には、家集への入集事情



〔表三〕

歌	第一類本家集詞書	日記	日記歌
<p>115 菊の露若ゆばかりに袖触れて花の主に千代はゆづらむ</p>	<p>九月九日、菊の綿を上<small>の</small>の御方より賜へるに</p>	<p>九日、菊の綿を、兵部のおもとの持て来て、「これ、殿のうへの、とりわきて。いとよう老のごひ捨てたまへ」と、いとまはせつる」とあれば、(後略)</p>	<p>九月九日、菊の綿を、「これ、殿の上、「いとよう老のごひ捨てたまへ」とのたまはせつる」とあれば</p>
<p>116 雲間なくながむる空もかきくらしいかに偲ぶる時雨なるらむ</p>	<p>時雨する日、小少将の君、里より</p>	<p>小少将の君の、文おこせたる返りごと書くに、時雨のさとかきくれば、使もいそぐ。(中略) 暗うなりたるに、たちかへり、いたうかすめたる濃染紙に、</p>	<p>小少将の君の文おこせたまへる返り事書くに、時雨のさとかきくれば、使も急ぐ。(中略) 立ち返りいたうかすめたる濃染紙に</p>
<p>117 ことわりの時雨の空は雲間あれどながむる袖ぞかわく世もなき</p>	<p>返し</p>	<p>書きつらむこともおぼえず、</p>	<p>返し</p>
<p>118 浮き寝せし水の上のみ恋しくて鴨の上毛にさえぞ劣らぬ</p>	<p>里に出でて、大納言の君、文たまへるついでに</p>	<p>大納言の君の、夜々は、御前にいと近う臥したまひつつ、物語りしたまひしけはひの恋しきも、なほ世にしたがひぬる心か</p>	<p>大納言の君の、夜々御前にいと近う臥したまひつつ、物語りしたまひしけはひの恋しきも、なほ世にしたがひぬる心か</p>
<p>119 うち私ふ友なきころの寝覚めに は番ひし鴛鴦ぞ夜はに恋しき</p>	<p>返し</p>	<p>かへし、</p>	<p>返し</p>

に共通するものがある。即ち、87は、敦成親王誕生五日の産養の夜、「盃のをりに、さし出づ」として、また115は、「九月九日、菊の綿を上のの御方より賜へるに」として、家集中では、いづれもその場で献詠された歌のように扱われている。しかし、日記においては、式部

が歌を詠んで奉ろうと心用意をしているうちに、前者の場合には、特別な指名もないまま公任が退席してしまつたと記し、後者の場合には、倫子が自分の部屋の方へ帰つてしまつたと聞いて、歌は「よくなきにとどめ」とする。日記の文章には、精一杯の賀歌を詠ん

て貞節に奉らうとした心組みが無視されてしまふ無念さが揺曳するが、家集の詞書は、いずれもそうした要素を払拭して組立てられている。思うにこのことは、編者が事柄の当事者であるが故になされた事実の組み替えであつて、編者が他人である場合には、先行の「紫式部日記」の記述に牽引されずにはおかなかつたであらうと思われ

る。

116・117の贈答の詞書は、日記の文章からも「日記歌」の詞書からも容易に引き出せるものではある。一方、117の歌の第五句は、第一類本家集で、「かわくよもなき」であるのに対して、日記と藤田別本「紫式部日記絵詞」では「かわくまもなき」であり、第二類本本付載「日記歌」および「紫式部日記歌」は、陽明文庫本・本居文庫本などでは「よもなき」、内閣文庫本・松平文庫本では「まもなき」、也足叟本・同乙本では「まぞなき」と、本文の揺れを示す。「日記歌」諸本に異同が見られるのは、よとまの誤写と思われるが、第一類本家集日記が、それぞれ「よもなき」、「まもなき」で統一されていて、諸本間に本文の異同が見られないことを考えると、この歌はもとと家集と日記に歌詞の異なる形で入っていたのではないかと推測される。

家集118の詞書は、118・119の贈答の事情を「里に出でて、大納言の君、文たまへるついでに」と記すが、日記の文章からこうした詞書を引き出すことは不可能である。このような新たな事柄の付加が、事情を知らぬ他人によつてなされたとは考え難いのであつて、118・119の贈答は、やはり式部自身の手によつて集中に置かれたと見るべきであらう。

さらに、この「菊の露」歌群の前後に眼を転じると、第一類本と第二類本との間に大きな差異が認められる。

月見る翌朝、いかに言ひたるにか

114横目をも夢と言ひしは誰なれや秋の月にもいかでかは見し

△115～119「菊の露」歌群▽

又、いかなりしにか

120何ばかり心づくしにながめねど見しに暮れぬる秋の月影

(第一類本)

第二類本では、右の第一類本から、114と120の間に、「菊の露」歌群と120の歌の詞書を欠く形となつてゐる。さらに大きくこの部分の前後を見ると、第一、二類本で歌序を同じくし、前に位置する109～113は宣孝らしき男との贈答歌群、後の121～125は友との贈答歌群で構成される。そのうち、109・110は「七月ついたちころ」に、111・112は七月七日に交されたもの、113は、男が門前を素通りしながら「うちとけたらんを見む」と文をよこしたのに対して応酬したもの、121・122は相撲の節会の日に内裏で同僚女房と交した歌、123～125は初雪の夕暮に友と身の憂さを歎き交したものである。

今井源衛氏は、もしこの中間五首（「菊の露」歌群）が増補だとすれば、「又、いかなりしにか」の詞書を第一類本が何によつて記したかが分らなくなるとして、第一類本の方を本来の形と考えられ、第二類本では脱落損傷が「又、いかなりしにか」の詞書にも及んだかあるいは、第二類本書写者がこの一行を故意に省いたかと考えられると述べられた<sup>22</sup>。これに対し、竹内美千代氏は、第二類本の形態を自然とし、この箇所に錯簡が生じて「何ばかり」の歌が後に入り、詞書がないのでどれにでも向く詞書をつけたか、作者自ら歌集編纂の際に所懐の歌として後に置き詞書をつけたか、いずれかであらうとしておられる<sup>23</sup>。錯簡説をとられるのは木船重昭氏も同じで、「又、

いかなりしにか」の詞書については前掲今井氏の説を引きつつも、120の歌が114の歌の次にあれば、114の詞書の「いかに言ひたるにか」と、120の詞書の「又、いかなりしにか」とも、ごく自然に続くべきである。今井氏の如く、115と119の「菊の露」歌群と120の詞書の、第二類本における脱落損傷を想定するのならばともかく、115と119の五首を第一類本における錯簡とする考え方には、第一類本120の詞書の存在を説明する上で無理な感じが否めない。機械的な錯簡箇所以後人の手が入って詞書をつけたというのも、一つの想像でしかありえないし、また、木船氏の如く、114・120の詞書と歌が連接する所に115と119が錯簡によつて入つたと考えれば、現存第一類本の形態の説明は容易であつても、第二類本に何故120の詞書が欠けているのかが判然としない。そもそも、第一類本に錯簡ありとすれば、第二類本の方に、錯簡前の形態の痕跡が残されているはずではないか。

河内山清彦氏は、次の二点を挙げて、積極的な増補説を展開しておられる。即ち、

(一)115と119の歌群を欠く第二類本家集では、109「七月ついたちころ」から125「初雪」の頃へと、歌が季節の順序に展開しているのに対し、第一類本では、109から119までは歌が季節的時間の進展に沿つて配列されているものの、十一月十日前後の118・119の贈答から次の120における「秋の月影」を詠じた歌へは季節がつかない。

(二)疎遠になりかかつた男に対して強がりとともに同情を求める気持ちを織りこんだ120の歌は、男の不実を責める114と同時に、「月みるあした」に詠み送られた補充関係にある一連二首であるはずで、第一類本のような配置になると、「又、いかなりしにか」とあるにより、120は118・119の贈答の相手大納言の君に送られたことになつて、

歌意がとれなくなる。それでなくても、凍てついた「鴨の上毛」を詠じた後に、「又、……」として「秋の月影」を詠出したというのは、錯乱もはなはだしいことになる。

として、第二類本家集を座右に置いて本文の補遺をはかつた第一類本編者が、おそらくそれが第二類本「よこめをも」の歌で一葉が終る写本であつたため、次の一葉がいきなり詞書を欠いて和歌から書き出されていたので、その間に是非「紫式部集」の中に加えておきたいと思う歌をはさみこんだものと推察されたのである。しかし、この考え方は、かなり恣意的と言わねばならない。118の詞書が、式部ならぬ余人のよくなしうるところではないことは先に述べたが、115と119を増補とするならば、その挿入の仕方は余りにも拙劣ではないか。河内山氏の言われる如く、秋の月を詠んだ114・120が二首一連の歌であつたとするならば、何故一連の歌を分断してまで五首の歌を挿入しなければならなかつたのであろうか。115が寛弘五年九月九日の歌であり、119が同年十一月中旬の歌であることは日記により明らかであるから、115と119を120の「秋の月影」の歌の後に挿入するかまたは、日記中の所載順に従つて、寛弘五年十一月二十三日の豊明節会の日々に詠まれた100の歌の前に置くことも可能だとははずである。さすれば、「又、いかなりしにか」の詞書を新たに付加する必要も生じなかつたであらう。こうした不自然さを解消しようとして、河内山氏は、114の歌で一葉が終つていたとの推測を持ち出されたのであろうが、こうした無理な想定をしなければならなかつたところに、この増補説の矛盾が露呈しているように思われる。

翻つて考えるに、114と120はそもそも二首一連の歌だったのであろうか。114の歌は難解であるが、月見の夜訪れてこなかつた男（おそ

らくは夫宣孝)が翌朝弁解がましいことを言ってきた時の、恨み、反発入り交った答歌であろう。120の歌は「何ばかり心づくしにながめぬど」と詠むが、月見の夜、夜離れの夫を空しく待つ女は、物思いの限りを尽すのではないか。時季は「飽き」と通う「秋」なのであるから、尚更である。114の歌のような状況下で、「秋の月影」を「何ばかり心づくしにながめぬど」とは、到底言えないであろう。同じく秋の月を詠んでいることを理由に、114と120の歌を簡単にくりくりにしてしまうことはできない。109、114が男の夜離れに関する歌であるのに対して、120は物思いの身を述べた歌であって、宮仕えを「すまひ憂し」とする121・122の贈答、この世の憂さを友と詠み交した123・125の贈答へと、自然な展開をとげてゆくのである。かく考えれば、115・119は一つの独立した歌群として、もともと集中のこの場所に置かれていたとすべきであろう。第二類本がこの歌群と120の詞書を欠くのは、両系分岐後の第二類本における脱落である。

#### 四

115・119の「菊の露」歌群を除けば、家集所載の日記重出歌はすべて年時順―日記記載順に配列されていたことになるが、そのことをもってしてこの歌群の増補を論ずるべきではあるまい。各歌がほぼ年代順に配列されている前半部と異なり、後半部が必ずしも年代順配列になっていないことは、宮仕え生活歌群と宣孝関係歌群が交錯してあらわれることによつて既に明らかであるし、宮仕え生活歌群の内部にも、必ずしも年代順配列の原則が貫かれている訳ではない。100・108の宮仕え生活歌群のうち、唯一の日記所載歌である100が、寛弘五年十一月二十三日、豊明の節会の日歌であるのに対して、卯

月まで桜が散り残っているという稀代な例を詠んだ104・105が、寛弘四年の詠であることについては、岡一男氏の綿密な考証がある。また、100は、他の日記所載歌とは切り離されて、単独で100・108の歌群の最初に置かれているし、寛弘五年十月の水鳥の詠や同年歳暮の詠の如く、日記所載歌でありながら当初より家集に入れられなかったと思われる歌もある。してみると、式部は、家集を編纂するにあたって、必ずしも日記所載歌を「ままとりのもの」としては扱わず、むしろ家集の内なる方法に従つて、随意に集中に位置せしめたのだと言うことができる。敦成親王誕生賀歌群とでも称すべき87・90の歌や、宮仕え生活にあつて主家筋や同僚女房とのかかわりで詠まれた115・119の歌を、機械的な年代順配列によらず、別の歌群に分け、集中における意味をそれぞれに付与したところに、編者紫式部の家集に対する考え方が反映していると見るべきであろう。

以上、要約すれば、式部自撰の家集の原形においては、日記に重複する部分は、ほぼ現在の第一類本の形態の通りであつたと思われる。ただし、法華三十講歌群が現存第一類本と同じく七首の歌を擁していたかどうかはさだかでない。それが、伝写の間に、第一、二類本共通の祖本の段階で法華三十講歌群に損傷脱落を生じ、両系分岐後に、第一、二類本がそれぞれに独自の補修を行った。両系統本において補修の資料とされたのは、現存日記冒頭部以前に合綴されていた(仮称)「中宮土御門殿滞在記」であつたが、第一類本75・76の水鶏の贈答も、この時、同一資料から挿入されたのである。第二類本が115・119の「菊の露」歌群を欠くのは、この系統における独自の脱落であろう。かくて、第二類本付載の「日記歌」が編まれたのは、第二類本家集が「菊の露」歌群を脱落させて後、日記の方も、現存

冒頭部の前にあつた「中宮土御門殿滞在記」が前半部と後半部とに分れ、後半部の中宮御堂詣での記事以後が、現在の位置に移動して後のことであつた。

先にも触れたように、紫式部は家集を編纂するにあたって、単なる年代順配列でも、また類纂の方法でもない、家集の内の方法によつて歌を配列することを試みたかの如くである。その「方法」が如何なるものであつたかについては、稿を改めて考えねばならないが、式部自身の中には、自らの家集を詠草の集成というにとどまらない、それ自体独立した一箇の作品として完成させようとする意図が働いていたように思われる。そうした方法が式部によつて貫徹されたか否かは疑問であるし、後世の編者に十分に理解されたとも思われぬ。それは、私家集なる形態に終に免れえない宿命ではあつた。

ただ、「紫式部集」の場合には、一方に「紫式部日記」なる作品が厳然としてあり、日記中の歌のすべてが家集に収められてはいないことが明らかであつたため、後世の編者もあえて恣意的な増補を行うことはしなかつた。第一類本の増補と考えられている法華三十講歌群が、実は補修されたものであり、第二類本付載の「日記歌」が、集中への増補ではなく、付載・追記という形をとつた点にも、この間の事情がよくうかがえる。かく考えれば、「紫式部集」の原形態の追究は、まず従来の増補論の見直しから始められねばならないのではなからうか。

注

(1) 岡一男「源氏物語の基礎的研究」一七七―一七八頁。竹内美

千代「紫式部集評釈」二〇九頁。清水好子「文体を生むもの紫式部集」『国文学』第15巻6号 昭和45・5。南波浩「紫式部集の研究」校異編『一三五―二四〇頁。

(2) 伝本および伝本系統の名称は、注(1)掲出の「紫式部集の研究」校異編による。

(3) 池田亀鑑「紫式部日記」七一頁および七四頁。

(4) 注(3)の書 七一頁。

(5) 注(2)の書 二三四頁。

(6) 注(2)の書 四一三―四二二頁。

(7) 以下、算用数字で示す歌番号は、注(2)の書「諸本校異」の統一番号である。論述の都合上、諸氏の論考で用いられた歌番号も、すべてこの統一番号に改めることとする。なお、家集本文の引用は、第一類本は岩波文庫「紫式部集」の「校定紫式部集(定家本系)」に、第二類本および第二類本付載の「日記歌」は新潮日本古典集成により、日記本文の引用は日本古典文学全集によつた。

(8) 「紫式部日記考―日記歌による日記の原形推定は不可能なるか」『国語と国文学』第13巻11号 昭和11・11。

(9) 石村正二「紫式部日記の原形と現存形態(上)―その首欠部分について―」『国語』第4巻1号 昭和30・8。

(10) 拙稿「中宮土御門殿滞在記の想定―紫式部日記の形式過程―」『国語と国文学』第55巻1号 昭和53・1。

(11) 「紫式部集の編者」『国文学』(関西大学) 第46号 昭和47・3。

(12) 菅野美恵子「紫式部集の成立―その構造に関する考察を中心

として」、『同志社国文学』第9号 昭和49・2。河内山清彦  
『紫式部集の成立と流布(三)―第二類古本系統の先行を論じて  
紫式部日記の首欠と日記歌の成立に及ぶ』、『青山学院女子短  
期大学紀要』第28輯 昭和49・11 のち一部改稿して『紫式部  
集・紫式部日記の研究』所収。上田記子『紫式部集と紫式部日  
記―成立論からみた関係―』、『同志社国文学』第11号 昭和51  
・2。久保木寿子『紫式部集の増補について』(上)(下)『国  
文学研究』第61・62集 昭和52・3 昭和52・6。

(25) 注(12) の同氏論文。  
(26) 注(18) の書 一一三―一二五頁。

―大阪成蹊女子短期大学教授―

- (13) 『紫式部集二類本・一類本の関係及び日記歌の成立にかかわ  
る一仮説』、『中世文学』第45号 昭和44・11。
- (14) 拙稿「紫式部日記における歌の場面について」、『同志社国文  
学』第8号 昭和48・2。および「日記と家集の間―紫式部日  
記と紫式部集―」、『中古文学』第20号 昭和52・10。
- (15) 注(11) に同じ。
- (16) 『紫式部集と紫式部日記―共通部分の比較を視点として―』  
『川瀬一馬博士古稀記念国語国文学論文集』(昭和54・12) の  
ち『紫式部集・紫式部日記の研究』所収。
- (17) 『紫式部集の復元とその恋愛歌』、『文学』第33卷2号 昭和40  
2 のち『王朝文学の研究』所収。
- (18) 『源氏物語の基礎的研究』三四五頁。
- (19) (20) 注(10) に同じ。
- (21) 校異は注(2) の書による。
- (22) 注(17) に同じ。
- (23) 『紫式部集評釈』一七四頁。
- (24) 『紫式部集の解釈と論考』二〇六頁。